

数字で見る全農グループ畜産酪農事業

生産者に寄り添い、農のチカラをつなぐ

全農グループが経営をサポートしている飼養戸数^{※1} (2023年4月時点)

21,665戸

全国飼養戸数に占める割合^{※2}

肉用牛	43.8%
乳用牛	26.3%
豚	24.4%
採卵鶏	30.5%
ブロイラー	24.0%

※1 生産者・配合飼料メーカーの積立と国からの支援により、配合飼料の価格高騰に備える仕組みを構築している「一般社団法人 全国配合飼料供給安定基金」の契約戸数 

※2 農林水産省「令和5年畜産統計」より本会算出（ブロイラーは全農チキンフーズグループの生産委託農場数より算出）

全農グループ生産農場^{※3} (2023年10月時点)

183カ所

地域の生産力減少を補うため、全農グループは農場経営にも取り組んでいます。

※3 全農グループが所管する肉用牛・乳用牛・豚・採卵鶏の農場数合計

| バリューチェーン | 数字で見る畜酪事業 |

数字で見る全農グループ畜産酪農事業

生産者の想いをカタチに

グループ会社売上高(2022年度)

5,398億円

畜産酪農事業分野の
全農グループ
主要販売子会社4社



全農ブランド「農協シリーズ」



鶏惣菜売店(リテール事業)
(株)アサヒプロイラー「麻布あさひ」



| バリューチェーン | 数字で見る畜産事業

数字で見る全農グループ畜産酪農事業

未来を拓く研究開発で畜産酪農経営をサポート

畜産酪農事業部の3研究所

飼料畜産中央研究所

飼料の主要成分分析数(2022年度)

33,059点

飼料畜産中央研究所は、近赤外線による飼料成分の分析標準を確立し、飼料の品質を維持しています。膨大なデータをもとに開発した飼料は、特色ある畜産物の生産にもつながっています。

家畜衛生研究所

家畜の衛生検査等の検体数(2022年度)

195,694検体

家畜衛生研究所は、農場運営の重大リスクである家畜疾病の予防衛生指導と動物医薬品の研究開発を行うことで、全国各地で農場の防疫体制の強化をサポートしています。

ET研究所

牛受精卵の年間供給個数(2022年度)

32,080個

受精卵移植技術を用いると同じ親から数倍の後継牛を生産できます。ET研究所は受精卵の製造・移植に取り組むことで、畜産農家の生産性向上と経営の安定に貢献しています。

サステナビリティ重要課題の特定

畜産酪農事業が目指すサステナビリティの方向性と課題

畜産酪農事業のバリューチェーンを次世代に向けて持続可能なものにしていくためにはサステナビリティ(社会・環境)課題を特定し、解決していく必要があります。

一般的に企業の事業活動には社会・環境に「与える影響」、社会・環境から「受ける影響」があり、それらは時間の経過とともに事業収支に表れてくるものと捉えられています(右図)。

「気候変動」を例に挙げれば、十数年前、牛のゲップ(メタンガス)などの家畜の飼養に伴う温室効果ガスの発生量が畜産酪農経営の収支に影響していると認識していた人はあまりいませんでした。

しかしながら近年、異常気象が相次ぐなど地球温暖化の影響が顕在化し、日常生活のなかで脱炭素を意識する消費者が増え、畜産物の需要にも徐々に影響が及びつつあります。消費面のみならず、モーダルシフトや共同配送、EVトラックの導入など物流面でも脱炭素社会への移行が求められ、それには設備投資などの具体的なコストが伴うようになっています。

私たちは生産者および消費者にとって持続可能な事業

を実現するために、社会の大きな潮流や対応が必要な項目を抽出した上でサステナビリティ重要課題を特定しました。

まず、全農グループ内で長期にわたる社会の潮流(地球温暖化、少子高齢化、人権問題、アニマルウェルフェア等)を議論しました。

次に、行政機関や取引先などさまざまな関係者と同様の対話を実施し、その中で挙げた項目について重要度合別・正負別に項目を分類しました(次頁の右上図)。

そして、事業が社会・環境に関わるうえで重要なものを畜産酪農事業における3つの「重要課題」として特定しました。それが「気候変動対策」「資源循環・耕畜連携」「アニマルウェルフェア」です。

重要課題は今後も社会情勢等を踏まえて定期的に見直していきますが、当面は3つの重要課題について正の影響を最大化し、負の影響を最小化していくことで、持続可能な畜産酪農事業のバリューチェーンを目指します。

■ サステナビリティ課題が事業収支に与える影響(一例)

事業にとっての影響が限定的で、顕在化していないサステナビリティ課題

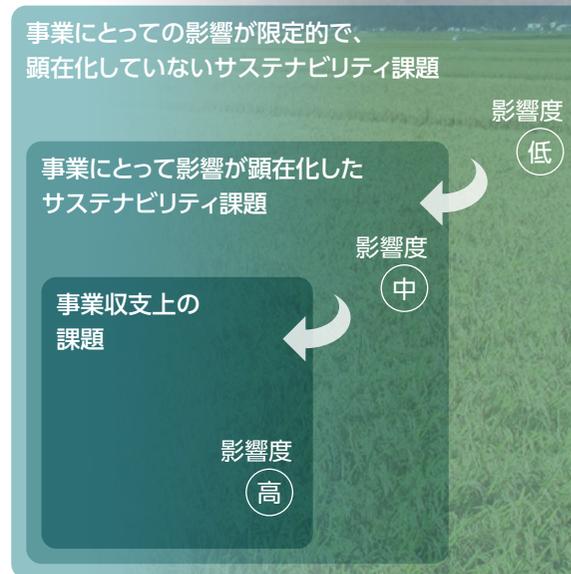
影響度
低

事業にとって影響が顕在化したサステナビリティ課題

影響度
中

事業収支上の課題

影響度
高



■ 重要課題の特定プロセス

持続可能な畜産酪農事業の実現に向けて、その達成のために重要課題を特定

Step1 全農グループ内での意見抽出
 サステナビリティ項目(テーマ)についてブレインストーミング。また、他部門や子会社とも意見交換

Step2 関係先との意見交換
 行政機関や取引先等と持続可能な畜産酪農事業に向けた項目について意見交換

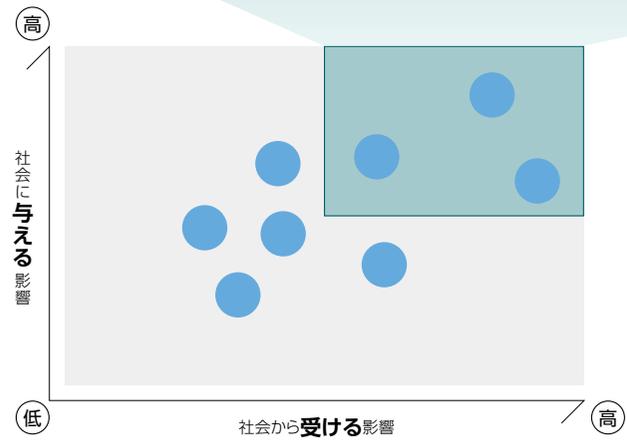
Step3 候補の選定
 Step1、Step2を踏まえて、目指すべき・課題・方向性等を整理

Step4 重要課題の特定
 本会会長の諮問機関である「畜産酪農事業委員会」における審議を経て特定

■ サステナビリティ重要課題

	気候変動対策	資源循環・耕畜連携	アニマルウェルフェア
正の影響	バイオマス発電による化石燃料の削減	稲わらや家畜排せつ物由来の堆肥等資源の循環利用による安定した食料生産システムの構築	生産者：労働安全衛生の改善 消費者：購買意欲の増進 家畜：ストレスの軽減、生産性の向上
負の影響	<ul style="list-style-type: none"> 家畜由来の温室効果ガス(メタン等)の排出 異常気象による飼料穀物の品質悪化および収量低下 	<ul style="list-style-type: none"> (適切に処理されない場合)家畜排せつ物による土壌汚染や大気汚染 包装資材に使われるプラスチック流出による海洋汚染 	(適切に対応しない場合) 生産者：労働安全衛生の悪化 消費者：購買意欲の減退・市場の縮小 家畜：ストレス過多、生産性の低下

■ 全農グループ畜産酪農事業の社会・環境との関わり



意見交換で挙げたキーワード

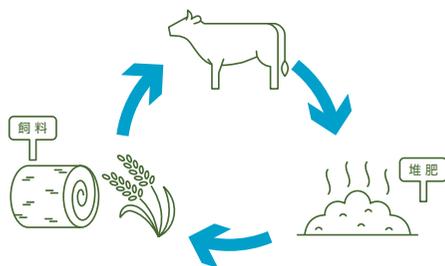
- ・ 気候変動対策
- ・ 資源循環・耕畜連携
- ・ アニマルウェルフェア
- ・ 人権配慮
- ・ 食品安全
- ・ 生物多様性
- ・ 人畜共通感染症
- ・ ダイバーシティ・インクルージョン

畜産酪農事業の サステナビリティ 重要課題

全農グループは特定した重要課題について、それぞれ目指す方向と課題解決に向けたアプローチを掲げ、社会・環境と調和した持続可能な畜産酪農事業を構築していきます。

目指す方向

畜産酪農事業を軸とした 循環型経済の実現

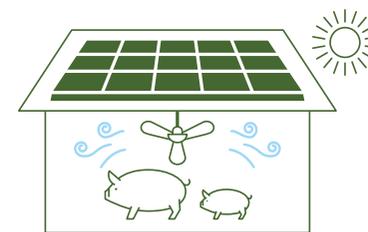


重要課題 1

気候変動対策

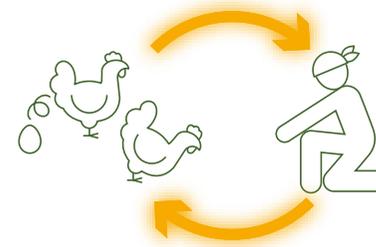
目指す方向

脱炭素社会に適応した 畜産酪農バリューチェーンの 構築



目指す方向

人と家畜の双方に より良い社会の実現



重要課題 2

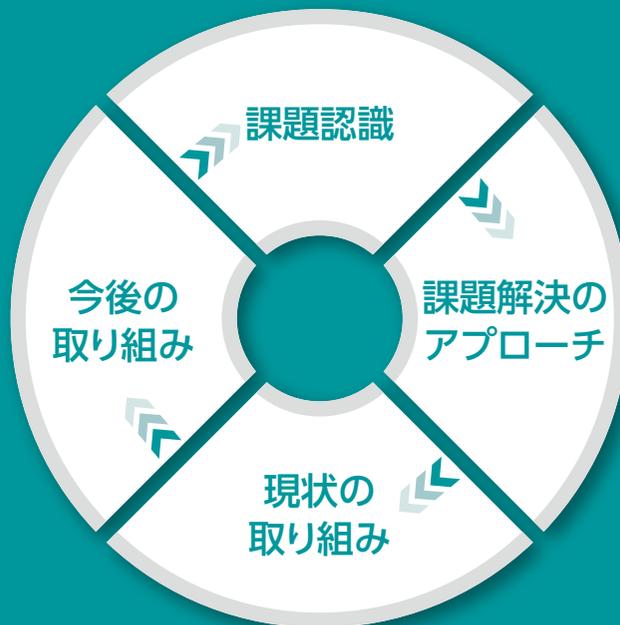
資源循環・ 耕畜連携

重要課題 3

アニマル ウェルフェア

持続可能な畜産酪農事業の推進

重要課題の解決に向けた
取り組み進捗を情報開示しながら、
農家・社会から必要とされる
畜産酪農事業を目指します。



重要課題

1

気候変動対策

脱炭素社会に適応した畜産酪農バリューチェーンの構築

コンテンツ

- 課題認識
脱炭素社会における畜産酪農事業とは
- 課題解決のアプローチ
脱炭素社会に適応した畜産酪農事業を目指して
- 現状の取り組み <測る>
温室効果ガス排出量算定の考え方
温室効果ガス排出量の算定結果
- 現状の取り組み <減らす>
生産・物流の現場で取り組みを拡大
- 今後の取り組み
バリューチェーン全体で3ステップを推進

課題認識

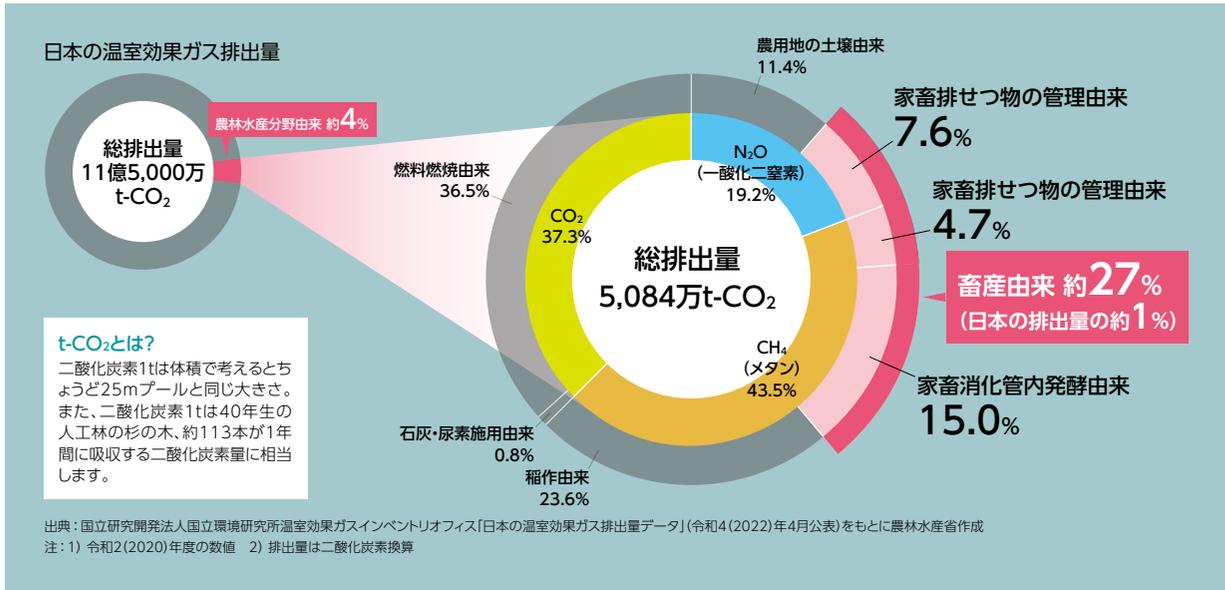
脱炭素社会における畜産酪農事業とは

近年、猛暑で熱中症になる牛が続出するなど、地球温暖化は畜産酪農にも影響が及んでいます。一方で、畜産酪農は牛のげっぷ(「消化管内発酵」と呼ばれ、メタンを排出)や家畜の排せつ物(メタンと一酸化二窒素を排出)によって地球温暖化に影響を及ぼす産業でもあります(右上グラフ参照)。

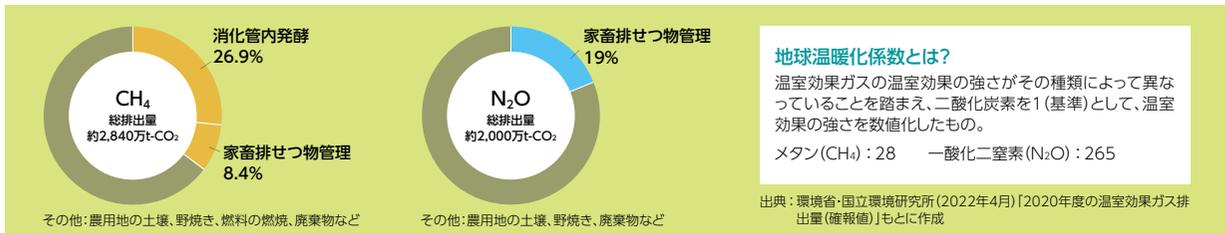
わが国の農林水産分野における温室効果ガス排出量(CO₂換算)の中で、畜産酪農に由来するメタン(CH₄)と一酸化二窒素(N₂O)が約3割(約27%)を占めます。メタンや一酸化二窒素はCO₂に比べてそれぞれ28倍、265倍と非常に高い温室効果を有します。このメタンと一酸化二窒素はわが国のあらゆる産業のなかでも畜産酪農から排出される割合が大きいことから(右下グラフ参照)、これらの排出量を削減することは畜産酪農事業にとって避けては通れない課題であるといえます。

ここで示した排出量は家畜由来のものですが、本会畜産酪農事業部は飼料の調達から処理加工・販売の各段階での輸送や電力の消費によるCO₂の排出もあり、その削減についてバリューチェーン全体で進めていく必要があります。

■ 農林水産分野の温室効果ガス排出量の内訳



■ 日本のCH₄とN₂Oの総排出量



課題解決のアプローチ

脱炭素社会に適応した畜産酪農事業を目指して

温室効果ガスの排出量を段階的に削減する仕組みを構築

測る

全農グループ全体の排出量算定と連動し、畜産酪農事業(子会社・子法人を含む)のサプライチェーン排出量と、畜産物単位当たりの排出量*の算定に取り組みます。

* いわゆる、カーボンフットプリント。たとえば「牛肉1kg当たりの飼料調達から消費、リサイクルに至るまでのライフサイクル全体を通して排出されるGHGの排出量を「●▲kg-CO₂」と算定

減らす

家畜の飼養管理に伴い発生するメタンや一酸化二窒素の排出量を削減する技術の開発・実証を進めます(例:飼料の開発、肥育期間の短縮)。また、家畜排せつ物等のバイオマスを活用した再生可能エネルギーの利用について検討を進めます。

排出量を減らす取り組みを進めながら、具体的な削減目標の設定を検討していきます。

知ってもらう

排出量の算定方法や削減効果の見える化や情報発信に取り組みます。

削減の取り組みが正当に評価され、削減の好循環が生まれるように理解醸成を進めます。

